

森島豊 2011年3月13日

先週は、水曜日から、私どもの教会の暦ではイエス・キリストの十字架の御苦しみを覚える受難節に入りました。そのイエス・キリストの御苦しみを覚える週が始まったばかりの金曜日に、日本で大きな地震が起こりました。たくさんの方々がいのちを落としました。テレビから伝えられる映像にくぎ付けになる日々を過ごしたことと思います。私の親しくしている仲間たちとも連絡が取れない。皆さまの中でも痛みを覚えていらっしゃる方がおられると思います。日本語で「魂消る」という言葉があります。「これは魂消た」と驚きの思いを言い表す言葉です。漢字で書きますと、魂が消えると書きます。想像を超える出来事が起こった時に、魂が消え入りそうになる。自然災害が起こり、その力の大きさに驚き、自分たちの、今までもそうだったのですが、ちっぽけな存在に改めて気づかされて、魂が消え入りそうになる。神を信じても何にもならない。信仰が無意味にさせられる。信仰だけではない。人間そのものが無力で無意味にさせられる。魂が消え入りそうにさせられています。今一つの集落がそのまま水に飲み込まれていく光景を目の当たりに見て、どんなに心を痛めているか、はかり知ることのできない痛みを心にも体にも、今私どもの国は受けています。皆さまはこの光景を見られて、何を思われていたでしょうか。あの日、あの出来事を見て、信仰を求めている方々は何を考えておられたでしょうか。

かつて関東大震災を経験した牧師に富士見町教会の植村正久がおります。その植村の震災直後の礼拝で語った説教が今でも残されております。壊れることなど考えてもいなかった都心の中心的な教会が崩壊し、多くの仲間を失う中で、着る物も何もない。裸一貫で出てきたような人々に、しかし植村は御言葉を語った。皆御言葉を求めていたのです。全てを失い、魂が今にも消え入りそうになった人々が、その時に何もない教会に集まってきた。この世のすべての力あるものが崩壊した時に、魂を支える、命の源となる御言葉を求めた。そこで植村は、裸の人々に、自分を支えるすべのない人々に、キリストを着せるようにして、神がなおそこにおられることに気づかせる聖書の言葉を語った。なお神はあなたと共にいて支えて下さる。震災を経験した植村自身が、教会の人々と共にその聖書の言葉に慰めを受けた。

預言者とはいつもそうでありました。今朝共に聴きました預言者イザヤも同じことを語ります。自分たちの町が崩壊した。民族が全滅したのです。残された子どもと女性と年を重ねたものだけが、敵の国に捕囚の民として連れていかれた。その時に語られた言葉がイザヤ書です。神に見捨てられたと思う中で、この預言者も涙を流す。神に訴える。嘆きの言葉を祈ることしかできない。その祈りの中で、初めから約束されていた神の言葉を新しく聴き、それを民に伝えた。「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友アブラハムの末よ。……あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。…あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神／主は言われる。恐れるな、虫けらのようなヤコブよ／イスラエルの人々よ、わたしはあなたを助ける。」

このことをただひたすら語り続けた。神は私どもをお見捨てにならない。その神が私と共にいて下さる。悲しみのどん底にいるその者の傍らにおられる。その方が呼びかけられる。「イスラエルよ、ヤコブよ。私の愛する友アブラハムの末よ」。かつてある牧師から聖書の読み方を教わった時に、旧約聖書におけるイスラエル

とかヤコブという言葉、自分の名前に入れ替えて読んでみなさいと教えられたことがありました。「森島よ、豊よ、わたしの愛する友アブラハムの末よ。」。皆さまもそのように一度読んでごらんになっていただきたい。聖書の神は、私どもに呼びかけられる。名前を呼んで呼びかけられる。名前を呼ぶ。

先日、テレビをつけましたら、偶然ヘレン・ケラーの短いドキュメントが放映されていました。改めて色々知りました。目にも耳にも障害を持ち、言葉を話すことができなかった一人の女性です。本能のままに動物のように生きていた人でありました。そこに一人の女性が家庭教師としてやってくる。あの有名なサリバン先生です。このサリバン先生は当時まだ若干20歳だったそうです。彼女自身障害を持っておりましたが、学校を卒業し、家庭教師に派遣されました。まだ若い女性でありました。彼女が最初に行ったことは、ヘレン・ケラーと一緒に住むということ。そして、もう一つその生活の中で大事にしたことがありました。それは、すべてのものの名前を伝えていったことです。名前を伝えていった。鳥であるとか木であるとか草であるとか、名前を伝えていった。すべてのものには名前がある。名前があるということは、意味があるということです。そして名を呼ぶことで、人は人格的な関係に入る。人格的な存在になる。私は思うのですけれども、サリバン先生という方は、この方自身障害をお持ちでありましたけれども、恐らく彼女自身に何らかの経験があったのだと思うのです。名前を呼ぶ。すべてのものに名前がある。意味のない存在はない。名を呼ぶことで意味のある関係の中に入れていく。ある時に、ヘレン・ケラーは井戸の水を浴びながら、ウォーウォーと言います。ウォーター、ウォーター。水という存在に気づく。生きていく時に必要な水です。今一番必要とされている水です。この水の存在に気づく。気づいた時に名前を呼んだ。これはサリバン先生が来られて僅か一ヶ月の出来事だったそうです。水を知った彼女は、そこから新しく生きていく。そして不必要な人間など一人もいないと、皆神が愛しておられる一人ひとり、そのことを心と体に感じて、生涯、障害者教育の教育家として、生き証人として活躍していきます。

神が名を呼んで下さる。名を呼ぶ関係の中に入れて下さる。水の洗礼を受けると、私どもは新しく神を呼ぶようになります。お父さんと。神のことをお父さんと呼ぶ関係になります。しかしそれだけではない。私どもも新しい名前と呼ばれる。長崎で、カトリックの方と親しくなりました、カトリックの方々は洗礼を受けると洗礼名を与えられる。それを誇らしげに教えて下さいます。教会に来られまして、私も洗礼を受けていますと言われて、洗礼名を必ず言われる。どうやらカトリックの方々は、初めて会う信仰者とは、自己紹介をする時に、洗礼名を紹介し合って、そこから親しい関係を築いていくことが多いそうであります。聖書の弟子たちの名前とか、教会の歴史の中に現れた偉大な信仰者の名前とかを、教会によってつけていただきます。それは偉大な信仰者の聖さにあずかるという願いからも来ています。私の親しくなりました神父が教会に来ましてご自分の洗礼名を紹介して下さいました。その人の洗礼名はアントニオ。アントニオ山野聖嗣。強そうな名前でしょうと誇らしげに紹介して下さいました。私は聞きながら内心羨ましい気持ちにもなりました。新しい名前が与えられて、新しく生きることが出来る。プロテスタント教会は特に洗礼名というものをつけません。その神父からも尋ねられた。洗礼名はないのですか。洗礼名はない。けれども、私はこういうふうにした。特別に洗礼名を授けられることはないけれども、私どもは皆同じ名前を与えられるのです。それは「キリスト」という名前です、と言ったら目を丸くして驚かれた。そんな恐れ多い。もちろん、私もキリスト森島などと自分のことを呼ぶことはしません。けれども、洗礼を受けたら皆「キリスト者」と呼ばれるようになる。キリストのものとなった。私はもう私のものではない。自分が何とかしなければならぬ存在ではない。私はもうわたしのものではない。キリストのもの。キリスト者。キリストのものとしたのだ。

パウロはその同じことを「キリストを着ている」という美しい言葉で語りました。私どもは皆キリストを着ているのだ。私どもはよく着ているもので人を見分けます。男性と女性では着ているものが違う。民族によっても着ているものが違うかもしれない。年代によっても異なってくる。このような違いは個性でもありますので、とても素敵なことだと思います。しかし、そういうこととは違って、私どもは時々着ているもので人を判断することがある。あの人は身なりが良いから偉い人なのだろう。あの人はみずぼらしいからきっと身分の低い人ではないか。そして接し方まで変わってきってしまうことだってある。ある人は大事に扱い、ある人を軽んじることもある。着ているもので判断しなくても、たとえばレッテルを張るという言葉があります。一方的にある評価を自分たちで下している。男は女でないことを主張することで、男であることを誇る。まるで男であることが価値のあるように思っているところがある。男の赤ちゃんが生まれることを、他のことをよりも重んじることだって起こる。女性を軽んじる。こういうことが昔からなされてきました。最近はこの逆のことだって起こっているかもしれない。自分が女であることを主張しながら、男性を軽蔑している。老後の世話は娘の方がきちんとすると、娘の誕生を喜ぶ声も聞こえる。しかし本当は男も女もない。人間の尊さを思うところでは、男も女もない。ここに人間をどのように見ているかという問題がある。ガラテヤの教会は、自分たちでも気付かない内に、自分の仲間の人間としての価値をはかっていたのです。そこで間違った行動に出てしまった。福音を無きものにしてしまう。ユダヤ人はギリシャ人を軽蔑する。自由な身分のものは奴隷を差別する。奴隷は自由な身分のものに嫉妬し、ねたむ。若者は老人を軽んじている。老人も若い世代を軽蔑している。本当に人間らしく人間を見ていない。神が私どもを見ているように見ることができない。そこでパウロは言うのです。神が見て下さっておられるように、今この現実を見よう。神の前では、そこで価値の違いはない。そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人の違いも、奴隷も自由な身分の違いもなく、男も女もない。その違いは関係ない。「あなた方は皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」。「洗礼を受けてキリストと結ばれたあなた方は皆、キリストを着ているからです」。そこに生きようと呼びかけたのです。

教会で『季刊教会』という雑誌をとっております。入口のところにいつも置いてありますが、その中で淀川キリスト教病院のホスピスを長くされたキリスト者で柏木哲夫という方が、御自分のホスピスでの経験を語っている文章が寄稿されています。この方はその働きの中で、**2500**名もの方々の最後を看とって来られた。その臨終の床で、どんな言葉を語り、家族がどんな言葉をかけているかを見てこられた。この方は、その時に、終わりの時に、その患者の生き方や、家族との関係がわかると言っておりました。そこでこの方の印象に残っている患者さんの言葉をたくさん紹介している。紹介しながら、色々考えさせられたのでしょう、この人は終わりの時を「衣がはげ落ちる末期」と言うのです。末期、終わりの時、その時は衣がはげ落ちる。裸になる。全てがあらわになる。

高級なスーツでピカピカの靴を履いて来ても、病院に来れば皆パジャマを着る患者になります。社会の中では、色々な服を着ています。警察官や車掌やナースはそれぞれそれと分かる服を着ているけれども、その服を全部脱いで患者となります。また社会的な衣、社長とか先生とか作家など、色々な社会的な衣を着ていますけれども、末期になりますとそのような社会的な衣がはげ落ちてしまう。皆パジャマを着る。衣を脱いでパジャマを着れば、皆同じ立場になる。末期、それは今まで身分を表したり、効力を発揮した魂を覆っていた衣が全部はげ落ちて、魂がむき出しになる時、それが終わりの時であります。そのむき出しになった魂に平安がなければ大変なことになる。その魂を覆うものが何もなければ、不安が一気に現れます。

そこでこの柏木先生は、とても印象に残っている一人の肺がん末期の女性の最後を紹介しています。彼女はキリスト者でした。少し長いですが、その文章を紹介します。

診察するともう既に呼吸音がかなり弱い。レントゲンを見ると肺が真っ白。死は近いと思われた。するとその女性は、「先生、私近いと思っています。それはいいのですが、息苦しいのがとてもつらいのです。これさえましになればありがたいです」と落ち着いていった。ステロイドと少量のモルヒネで息苦しさはかなり軽減した。入院してから一週間目の回診のとき、彼女は「明日か明後日のような気がします。わたし、先に行っていますから、先生もまた来て下さいね」と言った。あまりにも自然な言い方だったので私も「ええ、いつ行けるか分かりませんが、私も行きますから先に行って待って下さい」と言った。キリスト者であった彼女は死後、神の国、天国へ行くということを確認しているように感じられた。それから二日後、呼吸が浅くなった。病室に駆けつけて脈をとるとかなり弱い。彼女の名前を呼び掛けると、目を開いて「先生、お世話になりました」と意外にしっかりした声で言った。娘さんが彼女の手をしっかり握っていた。しばらくの沈黙の後、彼女は小さな声で、しかし、かなりはっきりと、「行ってくるね」と娘さんに言った。娘さんは「行ってらっしゃい」と答えた。ユニークなやり取りだった。短い会話の中には再会の確信があった。

紹介しましたこの最後の時は、ユニークな最後です。皆が皆、このようになるとは思いませんし、またそうする必要もありません。ただ、教えられることは、この女性は、むき出しの魂に何も着ていなかったのではない。キリストを着ていた。キリストに覆われていた。どんなにはげ落ちていっても、キリストだけははげ落ちることはなかった。キリストを着ていたのです。キリストのものとされている。神の子とされている。永遠の命という素晴らしい希望に生きることが出来る。

安全と平安は違います。安全とは、この世の知恵を使って身を守ることです。こういうことはとても大事です。けれども、この世の知恵だけでは平安は得られません。平安は神から来るものなのです。神が共にいて下さる、その確かさに平安はあるのです。この女性は、魂がむき出しになった時に、そこにどっしりとした平安があった。キリストが覆っておられたのです。キリスト者とはそういうことです。

3月というのは、別れの時期です。また今は色々な意味でつらい別れが訪れるかもしれません。今月恐らく何度も歌うのが讃美歌の405番です（長崎平和記念教会では、転勤、進学で長崎を離れる人を讃美歌と祈りでもって祝福の派遣をしています）。「また会う日まで」という讃美歌です。この元の言葉は、「イエスの足元で会う日まで」となっています。キリストの御前で、その足元で、主を礼拝する仲間としてまた会うことが出来る。私どもの愛が再会を保証するものではありません。キリストが私どもをもう一度会わせて下さる。甦りのいのちを約束して下さい。その神が共にいまして、行く道を守って下さい。この人もあの人も、その行くべき道をあなたが守って下さい。またあなたの御前で皆と再会するまで、色々なことが起こるけれども、嵐吹く時でも荒野に行く時でも、いつも共にいて導いて下さい。あなたの足もとに導いて下さい。そう祈り讃美する歌です。キリスト者とはそのように歌えるのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたものは、その平安の中で生きることができるのです。

私がアメリカにおりまして、牧師として献身する思いを新しく与えられた教会に行きました時、礼拝の中で平和・平安のあいさつを交わす時間がありました。讃美歌を歌っている中で、何人もの方が挨拶に来てくださ

った。一人の老婦人が、かなり大きな体格でしたが、私を包み込むようにして抱擁してくれました。その感覚を今でも忘れることができません。まるでキリストを着せられるように包み込んでくれた。異国の地で、心細く、孤独を感じて不安の中になりましたが、しかしキリストの中にある、キリストのものとされている。そのことを深く教えられる交わりでありました。教会に生きるとはキリストを着せられるということです。洗礼を受けて、キリストに結ばれた私どもは皆キリストを着ているのです。どんなに孤独でも、どんなに暗い夜を過ごしても、キリストが共にいて下さる。

まだ、洗礼を受けておられない方は、ためらわずに、この交わりに入ってきていただきたい。洗礼を受け、お客さんではなくて、教会の一員として、キリストのものとされる人生を歩み出していただきたい。私どもは、キリスト・イエスにおいて一つなのです。皆神に愛されている子どもなのです。いま一つになって、皆と一緒に、祈り合わせたいと思います。一つになることが出来ます。今皆と一緒に、悲しみの中にある人々に、神が共にいて支えて下さるように、主の慰めを共に祈りましょう。

祈ります。

父なる神さま、今、心に痛みを持ち、傷を負っておりますこの国を慰めて下さい。特に今、暗い夜をこれから何日過ごさなければならぬかと思わされている者に、あなたが近づいて下さい。あなたが助けて下さい。私どもを動かしてください。まだ揺れ動くその場所にあつて、不安の中にある一人ひとりを、しかし主が共にいて支え導いて下さいますように。突然の別れの悲しみを受けた者が、しかしそこで本当に必要な慰めと支えと助けが与えられますように、どうぞあなたが近づいて下さい。必要であればどうぞ私どもを遣わしてください。今私どもに出来ることは、ほとんど何もありません。しかし、祈ることが出来ます。あなたに祈ることをこの機会に改めてもう一度覚えることが出来ますように。そしてこの国がこのことをもう一度改めて、よい機会として、新しく一つとなる道を皆で発見することが出来ますように、どうぞ私どもに語る言葉をいつも与えて下さい。

私ども教会の一人ひとりが、この遠くにある被災のことで、近くにある問題を抱えている人を忘れることがありませんように。私どもの近くにも病の中にある者、多くの問題を抱えている者、そこに心の目を届けられないほどにうずくまっている者もおります。私ども教会がその者のことを忘れることがありませんように。いつでも神さまの前にあつては、違いはないのですから、いつでもそのことを思い起こし、神の前に立ち帰り、そこで新しく生きる心を伝える器とさせて下さいますように。涙を流しているその者にあなたが慰めと救いの御手をお与えください。

この受難節、改めて祈ることを始められますように。真の救い主イエス・キリストの名によって御前に祈り献げます。アーメン